

■□ まとめ

「深い学習」と協同による地域の再生へ

上掛 利博（本研究所研究委員会委員長 京都府立大学教授）

昨年総会記念シンポジウムのテーマは「超高齢社会における暮らしとまちづくりへの多様な接近」で、とくに、生協のすべての事業や活動のあり方を組み換える必要があるのではないかという提起をしました。超高齢社会における組合員や地域の人びとの暮らしに寄り添い、配慮が必要な高齢者・高齢期をしっかりと支えられるように組み換える必要があるのではないかということで、標準的なモデルはないということ、暮らし・地域・生協それぞれの多様性の持つ意味、協同組合の地域化、というような問題を論ずることができました。それらの焦点は、「一人ひとり、協同、主体の形成（人間の発達）」といったことは、つまるところ、地域で実現可能になるのではないかということでした。

そこで今年のシンポジウムでは、「地域再生と協同」を掲げて、協同組合に何を期待するかを取り上げました。3人の報告を通じて、はっきりしてきたことがあります。

1つは、「地域のイメージ」がどう捉えられているのかということです。これは「地域の課題は何か」という問いに置き換えてもいいのですが、「地域」をどうイメージしたか。人口問題（少子化の問題でもあり、高齢化の問題でもあります）、雇用の問題、教育の問題、医療の問題、環境・エネルギー問題、防災の問題、地域経済の問題などが出されました。地域の民主主義の問題として、地域の自治に関わる問題把握もできるのではないかと思います。

2つめは、「地域の規模」をどう捉えるかが論点になるのではないかということ。

3つめは、「地域の担い手」をどうイメージするかということで、考えなければいけない課題があるということです。

4つめは、「協同の意味」についてです。協同組合の仕組みを使ったら、いろいろな問題が解決できるのではないか。現に、就実大学で大学生協をつくったという画期的な事例の報告がありました。協同ということはどうイメージし、どのように地域で組み立てていくかという問題です。

5つめは、「協同組合の役割や可能性」について、すなわち地域再生に向けて協同組合はどのような役割を果たすことができるか、ということについてです。

＊

パネル・ディスカッションのなかでは、岡田さんから、当事者である労働者や中小企業家、農家、消費者の協同運動の連携が必要不可欠であるという発言があり、ここでも憲法13条（個人の幸福追求権）が挙げられました。「解題」のなかの山極総長の話でもふれましたが、いま日本の社会全体がマニュアル化し、ルールさえ守ればそれでいいということで、相手の気持ちに思いを致すことがだんだん減り、融通がきかなくなっている。しかし、人間らしい暮らしをするためには、一人ひとりを大切に、柔軟な対応ができる個人が育つことが大事ではないかと思います。

一人ひとりが大切であるがゆえに、個人が連帯をして「わたし」から「わたしたち

ち」として問題を考えることができるような方向性に、大きな意味があるのではないかと思いました。というのも、顔と顔が見える距離なり地域のなかで、生協や企業、NPO、さまざまなボランタリーな団体がつながって、地域の課題を解決できると考えるからです。

岡田さんは、そのためには「社会教育」が大事だと結ばれました。これは、主権者として組織したり、協力したり、判断していくような学習運動ですね。いま、「学習」という言葉を使いましたが、消費者市民社会をめざして、主権者としての教育の取り組みも大事だということです。学習という点で私は、「深い学習」ということを数年前のシンポジウムで提起しました。異なるものと向き合うことで、自らの価値観に変化をもたらすような学習です。それを思ったのは、ノルウェーの哲学者アルネ・ネスの「浅いエコロジー(シャローエコロジー)」と「深いエコロジー(ディープエコロジー)」という問題提起に学んだからです。彼は、「浅いエコロジーというのは、産業界の環境対策などが中心で、個人の生き方まで目を向けることが少なかったが、ディープエコロジーの場合は、個人の自覚や覚醒が非常に重要である。それは個人のあり方にとどまらないで、個々人が連帯していくような社会運動が大事である」という提起したのです。

すなわち、厚労省など上からの政策提起を追いかけて終わるのではなく、自分たちの地域の課題に引きつけて、その問題を解決するなかで、学習しつつ運動し、運動しつつ学んでいく。そうすることで、より深まり、そこに関わった地域の住民や生協の職員、理事さん、経営トップのみなさんが主語となって、さまざまな組織や人材と協力することで、地域のいろいろな問題を解

決していく展望を見ることができるのではないかと思いました。

*

最後に、本日の記念講演とシンポジウムから私が学んだことを紹介して、まともとさせていただきます。

第1に、記念講演のなかで、内山さんが「従業員協同所有事業体」という、協同組合と同じような組織形態のものについて紹介され、労働意欲が非常に高いとか、協力し合っている会社組織にしていこうという意欲が働いて、信頼される仕事の仕方につながっているというお話があり、興味深いことでした。

第2に、地域に根を張った暮らしを通じて、あるいは風土と調和するなかで人間同士のいろいろな関係が集積されている、いわゆる「関係の網の目」に注目する必要があるということです。

第3は、持続可能な労働体系をつくり、「人間らしい労働」や、それに向けて「働き方を変えていく」ことが、実践的にも理論的にも、わたしたち協同組合の課題になっているのではないかと思いました。

第4は、新しい能力を持っている人たちや、いろいろな情報提供をしてくれる人たちとの交流のなかに、地域を活性化させるヒントを得ることができるのではないかと、協同組合以外も含めて、地域にある「様々なグループとネットワークをつくる」ことができることの可能性や必要性を理解することが出来ました。

第5は、協同組合は、絶えず自分たちの「協同の世界」はどうなっているかということ問い直す必要があって、協同組合の運動を協同組合だけに限らないで、もっと広い観点から考えてみるならば、いろんな可能性が開けてくるのではないかということを受けとめました。

＊

井上ひさしさんが、『宮沢賢治に聞く』（文春文庫、2002年）のなかで、「これからの人間はこうあるべきだ」という見本のひとつが宮沢賢治である」という話をしています。宮沢賢治は科学者でしたが、井上さんは「科学が独走するところなことにはならない。そのブレーキ役が、宮沢賢治にとっては宗教である。宗教だけに凝り固まると独善になってしまう。その2つのものをコントロールしていたのが文学であり、文学が中間にあってコントロールできていたのではないか」と。また、「人間は多面体として生きるほうがいい。…野に立つ農夫は、四六時中農夫であればつまらない。それでは人間として半端である。朝は宗教者、夕べは科学者、夜は芸能者。そういう農夫がいて、いいのではないか」と述べておられます。科学、宗教、労働、芸能、みんな大切なものだけれども、それらをそれぞれが手分けして受け持つのでは、何にもならない。一人の人が4つのものを、自分という小宇宙、地域のなかで競い合わせることが大事だ、というわけです。

つまり、これは「生活文化の向上」という協同組合の大きな課題のひとつとも関係しますが、地域の再生を考えることは、つまるところ「人づくり」という点で、地域住民の主体性や、協同組合で働く職員の問題でもあり、あるいは理事さんや経営に携わる人の問題でもあり、きょうは、そういうさまざまな観点から「地域再生と協同」「協同組合への期待」ということの中身が語られたのではないかと考えています。